

# みめじみの

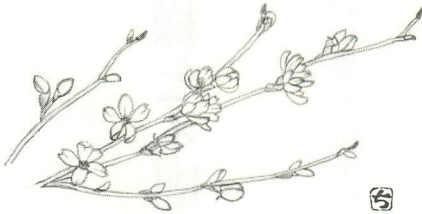
第44部





# みめじみの

## 第44部



5

大谷光道著

### 目次

阿弥陀様と本願(十一)	2
本願寺のお正月	10
御献杯	12
晨朝	16
元々	18
読者の頁	22
お知らせ	30
あとがき	31

## 阿弥陀様と本願（十一）

今回は、往生人の生活や仕事についての願で、第二十三願から第二十七願までです。

### 第二十三願

設我得仏、國中菩薩、承仏神力、供養諸仏、一食之頃、不能  
徧至、無数無量那由他、諸仏国者、不取正覚

私が成仏するとき、私の国（極楽）の菩薩が、仏（私）の不可思議な力を蒙ってさまざまな仏様を供養しようとするときは、一度の食事ほどの短い時間の間に、数限りない仏様方の国々に至ら

せてやりたい。もしそれができないなら、私は覚ったとは言いま  
せん。  
(供養諸仏の願)

高校時代、漢文で「一饋いっきに十度起つとたびた」というのを習ったのを思い出しまし  
た。これは、夏か(紀元前二十一〜一六世紀頃、伝説的な中国最古の王朝)の  
禹王うが賢者を迎えるために、一回の食事の間に十回も席を立ったという『淮  
南子なんじ・汜論訓はんろんくん』(思想書)の故事で、禹王うがそれほど政治に熱心だったとい  
う話です。

この第二十三願は、同じく「一回の食事という短い時間の間に、極楽の菩  
薩が数限りない仏様の国を飛び回って供養できるようにしてやりたい」とい  
う阿弥陀様(法蔵菩薩)のお誓いです。

昨年、「ニュートリノ」という素粒子が特殊相対性理論に反し光速より速い」と  
いう実験結果が発表されて話題になりましたね。OPERAという国際研究  
チームが発表したものです。

そもそも、「無数無量那由他の諸仏の国」ですが、一那由他は一〇の六〇乗とか、一説に一〇の七二乗なので、そのさらに無数無量倍という、気が遠くなるだけではすまない数の国々です。それを一回の食事の間に回ってしかも供養されるのですから、一つの仏様の国（浄土）から次の仏様の国（浄土）に移動するのにどれだけのスピードが必要なのか……。仮に今、光の速さで飛べる乗り物があったとしても、おそらくそれでも足りないでしょう。また、この実験結果が本当に正しかったとしても、光よりわずかに速いというだけなので、菩薩の移動されるスピードは、中々人間の手の届くスピードではないですね。まさに神業ならぬ仏業です。

## 第二十四願

設我得仏、國中菩薩、在諸仏前、現其徳本、諸所欲求、供養之具、若不如意者、不取正覚

私が成仏するとき、私の国（極楽）の菩薩がさまざまに仏様の

前で供養の徳を現すについて、欲しいと思う供養のための品を思  
いのままに得られないようであれば、私は覚ったとは言いません。

(供養如意の願)

供養の原語は「尊敬をもってねんごろにもてなすこと」(『岩波仏教辞典』)  
で、これは極楽の菩薩が他所の仏様の世界に供養に出かけられるときの必要  
な用具についての願です。

これは供養ではないのですが、私たちでも、他所よその家にお邪魔するとき、  
特に初めてお邪魔するときは、必ずお土産を持って行きます。この娑婆世界  
でも手ぶらでは行かないのが常識で、仏様の世界もそうなのかと、頷かせら  
れます。それにしても、その品を全て阿弥陀様が用意してくださるとい  
うのは、何と至れり尽くせりなのでしょう。

第二十五願 設我得仏、國中菩薩、不能演説、一切智者、不取正覺

私が成仏するとき、私の国（極楽）の菩薩が仏の一切智をもつてあらゆる法を説くことができないうのであれば、私は覚ったとは言いません。

（説一切智の願）

「一切智」というのは、完全なさとの智慧、仏様の智慧のことです。私たちは、この世で阿弥陀様から信心をいただいた（正定聚）、やがて極楽に往生すると成仏、つまり覚りを開かせていただきます。その覚りの内容は何かというと、親鸞聖人が『教行信証・証の巻』で、それは阿弥陀様と同じ内容だと説いてくださっています。したがって、その覚りの智慧によってあらゆる法を説くことができるようになるのです。

第二十六願 設我得仏、國中菩薩、不得金剛那羅延身者、不取正覺

私が成仏するとき、私の国（極楽）の菩薩が金剛力士のような堅固な身体を得られないようであれば、私は覚ったとは言いません





那羅延金剛：二王門（仁和寺）

那羅延ニ金剛力士。サンスクリット語 *Narayana* の音写。仏法の守護神とされた。  
那羅延金剛は密迹みせき金剛とともに仁王（二王）門に安置されている。

ん。

（那羅延身の願）

他宗派のお寺にお参りされると、山門の前に仁王門があり、仁王さんに遇われるでしょう。小さい子は泣き出すほど恐い形相ですが、恐いのではなく、仏法を護つてくださっているのです。まさに何者をも寄せ付けない、力の象徴とも言うべきスタイルです。極楽に往生すると、このような立派な体をおいただくのです。

## 第二十七願

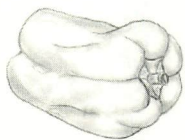
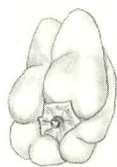
設我得仏、せつがとくぶ 国中人天、こくちゆうにんでん 一切万物、いっさいまんぶつ 嚴淨光麗、ごんじようこうれい 形色殊特、ぎようしきしゆとく 窮微  
極妙、ごくみまう 無能称量、むのうしやうりよう 其諸衆生、ごしよしゆじよう 乃至速得天眼、ないしたいとくてんげん 有能明了、うのうみようりよう 弁其  
名数者、みまうしゆしや 不取正覺、ふしゆしやうがく

私が成仏するとき、私の国（極楽）の天人や人々の用いるものはすべて清らかで麗しく、形も色も特に優れ微妙であることは、とても計り知ることにはできないでしょう。仮に人々が天眼通を得て、その名や数をはっきりと知り尽すことができるほどであった

ら、私は覚ったとは言いません。

（所須<sup>しよしゆ</sup>厳浄<sup>こんじよつ</sup>の願）

極楽は厳かで清らかな（厳浄）ところなので、当然のことと思われませんが、あたりの木や池、大地といったものだけではなく、「そこに住む人が使う物もすべて厳かで清らかにする」との、微に入り細に入った阿弥陀様のお心遣いが伝わってきます。



5

## 本願寺のお正月

昨年五月、新本堂の落慶法要と宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要を勤め、我が本願寺も一步前進の節目を迎えました。

その後、毎日の晨朝しんじょう（早朝のお勤め）はもとより、お盆、秋のお彼岸をすませ、十一月には、北海道その他遠方からの団体参拝も迎え、新本堂初めての御正忌報恩講を勤めました。言うまでもなく、報恩講は年中最大の法要ですが、今までの寺務所二階の仮御堂でのお勤めと違って、御遠忌同様、伝統通りの形でお勤めすることができました。報恩講に先立って、落慶や御遠忌のように出仕する僧侶に集まってもらい、念のため、もう一度おさらいの意



習 礼

味で一昼夜の習礼しゅらい（練習、稽古）も行いました。

古来、本願寺や各寺院では報恩講と並んで前住上人の御祥月命日（四月十三日）の法要を重視し、この二つを併せて両度りょうど（二度）の御命日と呼んでいます。

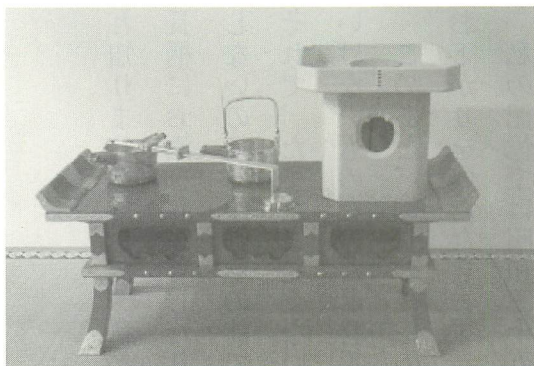
そして、もう一つの重い法要が修正会しゆしょうえ——お正月の法要——であること、さらに勤行の内容から見ると報恩講に次ぐものであることについては、意外と知られていません。今年は、この修正会も伝統

通りの形で勤めたので、この機会にお話ししておきましょう。

修正会は、お正月という新年のすがすがしい節目を祝うとともに、今年もお念仏の教えをいただいでいく一年の鑑かがみになる日として、気持ちを新たにする意味での法要です。したがって、元日は一年中毎日繰り返し読みでお勤めする和讃は『浄土和讃』の一番はじめ「弥陀成仏のこのかたは」で、同じく『御文』は一帖目一通「或人いはく」から読み始めます。要するに、「一年の計は元旦にあり」です。時折、「お正月やおめでたい時は神社にお参りするので、お寺には参らないもの」と思いこんでいる方があって驚きますが、これはとんでもないことです。

## 御献杯

その勤行に先立って、御献杯ごけんぱいという儀式があります。御献杯とは、その字のごとく、宗祖親鸞聖人の御真影にお酒を差し上げる儀式です。



長柄・くわえ・三宝

私の小さい頃までは、御献杯は非公開（秘儀）で、外陣と内陣の仕切りの金障子（折障子）はもとより、内陣の本間（中央部分）と余間（両側部分）を仕切る大きな障子（狭間障子）も閉め——もつとも、この障子は御献杯以外ではめったに閉めることはない——、完全にだれからも見えない中で、法主はじめ大谷家の得度した者のみで行う儀式でした。お杯を御真影に差し上

げられるのは法主ご自身で、新門は横の座でそれを見学します。当時私は連枝れんしでしたが、連枝じゆんと准連枝のみが法主のお手伝いをするこ  
とになっていました。連枝とは新門以外の法  
主または前法主の子、准連枝とは連枝の子で、  
得度した者のことを言います。

非公開であった頃、私自身も法主が須弥壇しゆみだん  
の前でどんなことをしておられるのか、ずつ

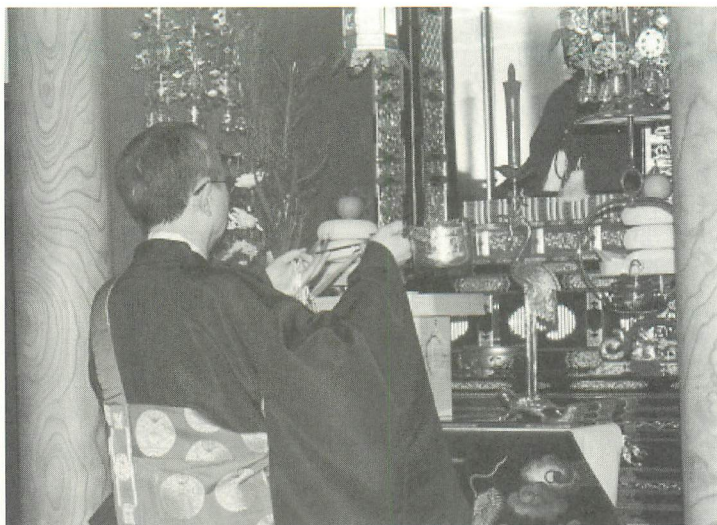
と知りませんでした。私たちは三宝さんぼうや長柄ながえを法主にお渡ししたり、くわえで長柄にお酒をお注つぎしたりするのですが、須弥壇の後ろから横までしか移動しないので、須弥壇の前で何が行われているのか、見えなかったからです。それで、たまたま見えないのではなく、何かの理由があつて、だれも見てはいけないものなのだと思つていました。

このあと、御堂の後ろの一室で、法主、新門、連枝、准連枝が所定の形でお下がりをおいただきます。

私の記憶では昭和三十五年頃と思いますが、御献杯は公開されるようになり、どなたでもその様子を参拝していただけるようになりました。

何事も、非公開だったものが公開されると、はじめはだれもが先を競つてそれを見ようとするものですが、回を重ねるにしたがつて、珍しいものではなくなり、秘儀であつたことの意味も失われ、秘儀であつたことそのものを知る人もいなくなるものです。





御献杯

公開されていることによって、

一つの仏事に多くの人が参拝し、

その喜びを皆で享受きやうじゆできることは

大きな意義のあることですが、秘儀であった元々の意味まで忘れられてしまうことは悲しいことです。

元々の意味は、これから一年の教化活動を始める、その前に当たって、「法主」ではなく「大谷家の当主」がそのご先祖に新年のお祝いのお酒を差し上げ、静かに対話する一時であったと言えます。

公開非公開、それぞれ一長一短で

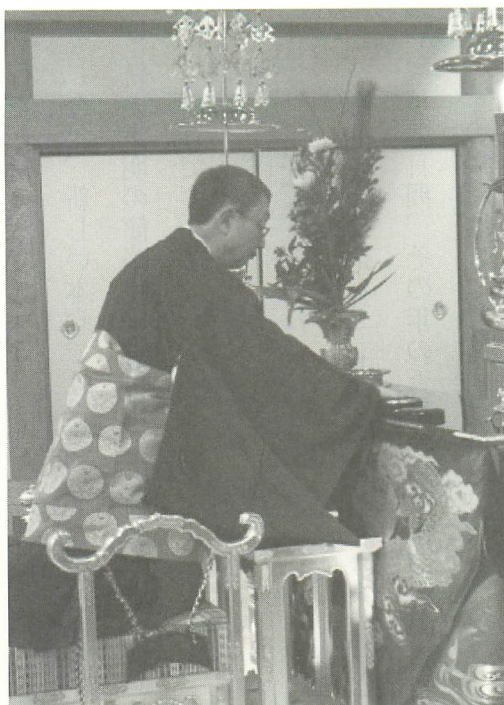
すが、公開したとしても、非公開であったことの意味をいつも偲ぶようにしたいものです。

ちなみに、お西（西本願寺）でも御献杯同様の「御酒海ごしゅかい」と呼ばれる儀式を、やはり御門主がお一人で行われるそうです。こちらは今でも非公開でなさっていると聞いています。

## 晨朝

昔は御献杯は朝五時に始まったのですが、思うほど寒くはなかったという記憶があります。それより、夜が明けて晨朝の勤行が始まり、御堂中の空気が動き出すと、首筋から背中に縦にお構いなく冷気が通るようになって、震え上がったものでした。

さきほど、法要の内容が報恩講に次ぐものであると言いました。まず、法主がいきなり中央の高座に登り（直登壇じきとうだん）、阿弥陀経を、御門徒の皆さんも



直登壇

聞き慣れない「漢音<sup>かんのん</sup>」という読み方で勤めます。このような法要は元日以外にはありません。その後、勤行と言えはお決まりの、そして御門徒にはおなじみの正信偈六首引きの念仏和讃です。しかし、十<sup>とゆり</sup>淘<sup>いじょうきよく</sup>の位上曲という、た

いへん重いお勤めです。

位上曲というのは本願寺だけのものです、元日と報恩講の初日、結願<sup>けちがん</sup>（最後の日）にだけ行ってお勤めです（『第四十二部』参照）。これからの一年、『和讃』を繰り返し読みしていく、その最初という重みをきっちり知らせる勤

行だと言えるでしょう。

今年、新しい本堂では、このような伝統通りのお勤めをいたしました。伝統の声明の簡略化、省略化の風潮の中で、私どもはあくまで伝統を守つていく所存です。

## 元々……

修正会は、元々「正月に修する法会」の意で、奈良時代以後、元日から三〜七日間、その年の天皇の無事、国家の繁栄を祈り、寺院で行われる法会（『大辞林』）の意味でした。

もちろん、浄土真宗では修正会を「祈り」という祈禱的な意味合いでは勤めません。ところが、浄土真宗に身を置く人の中には、修正会の発祥が「祈り」であることに過剰に反応して、修正会そのものを軽視乃至否定する風潮があります。しかし、アレ嫌いコレ嫌いを言っていると、仏法に遇えるあら

ゆるご縁を逃してしまふことになります。そんなことを言っていると、「起源のつかめない彼岸会や、目連尊者もくれん（お釈迦様の高弟）が餓鬼道に墜ちた母を救うのを起源とする孟蘭盆会うらぼんえ（お盆）など、浄土真宗ではない」と言わねばならなくなり、出口の見えないトンネルに入るしかありません。浄土真宗は、物事の本質をしっかりと押さえながら、あらゆる機会を聞法のチャンスと捉えていく姿勢が大切です。

私たちが日頃の生活の中で、国に対して感謝の思いを持つことは自然なことです。満足度はともかく、日本国憲法において、国に生命、身体、財産を守る義務を負ってもらっている上、少なくとも、浄土真宗の弾圧された時代とは違って、現在我が国では信教の自由が保障され、浄土真宗の布教が妨害されるようなことは一切ありません。

仏法王法は二双の法なり。鳥のふたつの翼のごとし、車のふたつの輪

のごとし。ひとつもかけては不可なり。かるがゆえに、仏法をもて王法をまもり、王法をもて仏法をあがむ。

(存覚師『破邪顯正鈔』)

ほか(外)には王法をもておもてとし、内心には他力の信心をふかくたくはへて、世間の仁義をもて本とすべし。これすなはち当流にさだむるところの、おきて(掟)のをもむき(趣)なり。

(蓮如上人『御文』一二帖目第六通)

王法||仏法に対して政治をいう語。

仁義||人の踏み行うべき道。人間が守るべき道徳。

などとあるように、私たち念仏の教えをいただく者は仏法を大切にしながら、同時に王法つまり国の法律や決まりを大切にし、世間的にも受け入れられる生活をするよう教えられてきました。

私たちが一国民として、修正会に「天皇の無事、国家の繁栄を素直に寿ぐお正月」という心持ちがあつても、今年もお念仏の教えをいただいでいこうという生活に何ら外れることでないばかりか、ごく自然な信心のあり方なのです。

これに加えて、大谷派などは、天皇制が好きではないようで、「天皇の無事」というところに強く抵抗している感があります。それは、昭和五十年代に旧東本願寺（現「真宗本廟」）の本堂（阿弥陀堂）の御本尊横の天牌（天皇の御寿牌）を取り払い、また大師堂（御影堂）の「見真」額——親鸞聖人が明治天皇よりいたただかれた賜号が「見真大師」で、その額が御影堂外陣正面に掛かっている。またこの故に「大師堂」とも呼んできた——を外す動きをしたりと、随所にその兆候が見えています。宗教団体の名において、天皇制の肯定だ、否定だのと、政治的に及ぶ課題に立ち入ろうとすることは慎むべきであると、私は考えています。

質疑  
応答

【四十二部】

山形県 鈴木 健太郎さん

**問** 「須弥壇取骨のお知らせ」の事で質問させて頂きます。母を東大谷に分骨してから三十四年の歳月が過ぎました。共に五十三才という若さで別れた父が五月他界しました。母が眠る東大谷へと思っておりました。

今回「みめぐみの」を拝読し九月から須弥壇取骨を開始されるとの事ですが、本願寺に分骨すべきか東大谷にすべきか考えております。

お考えを頂きたいと思えます。

**答** 今後とも私どもの本願寺をよりどころとされるおつもりなら、迷わずこちらに分骨されることをお勧めします。もちろん、東大谷にもお参りされれば良いでしょう。



亡くなった方々は、いま子孫がこの世で正しい教えを大切にしていることを、何より喜んでくださるはずですよ。

【四十一部】

富山県南砺市 河合 寛さん

**問** 正信偈の中に、至安養界証妙果とありますが、この安養界は肉体のある今、安養界に至るのですか。又、死後のことでしょうか。そして妙果を証するということは、どういう事なのでしょう。此処を、はっきりと知りたいのです。  
南無阿弥陀仏

**答** 阿弥陀様の浄土・極楽のことを、安養界・安養国・安養浄土・安養淨刹・安樂世界・極樂浄土……なども言います。私たちがそこに行くのは、死後のことです。

「至安養界証妙果」、「安養界に至りて、妙果を証す」とは、往生、成仏ということですよ。どこに往生するのかわかると安養界、つまり極楽です。どのような成仏かというと、妙果、つまり阿弥陀様と同じ内容の覚りを開くということです。「至安養界証妙果」は特別のことではなく、「往生・成仏」の別の言い方に過ぎません。いつも言うように、この世で信心をいただくことよって（正定聚）、命終わって極楽に往生し成仏するの

です。

次の御和讃も同じです。

如来すなはち涅槃なり

涅槃を仏性となづけたり

凡地にしてはさとられず

安養にいたりて証すべし

(『浄土和讃』)

凡地 凡夫の地位・境涯

また、浄土真宗の教えの大柱である次の四つを思い出してください。(『第三十一部』  
参照)

現生正定

現生(現世)で信心を獲たとき、正定聚の位に就く(往生の予約切符

をもらう)

彼土滅度

彼土(極楽・浄土)で、覚りを開く

信心正因

往生・成仏の正しく因(種)となるのは、信心である。

称名報恩

称名(念仏を称える)は、仏恩報謝のためである

『第三十一部』、その他バックナンバー、『いづれの行もおよびがたき』を参照してください。

【四十三部】

富山県南砺市 河合 寛さん

**問** 毎朝、仏前で御文を順番に読んでいます。その中で一帖目第十一通に「後生こそまことに永生の楽果なりと……」、二帖目第七通に「後生は永生の楽果なり」。

この永生の楽果という意味、そして私にどう体で感じさせてもらえるかについてお聞きします。正信偈で、自然即時入必定、必至無量光明土、必以信心為能入、と読んだ時に感動させられることもあります。よろしくお願いします。 合掌

**答** 毎朝、『御文』の拝読とのこと、誠に尊いことです。

この世は、五十年・百年という有限の時間で終わります。六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天人）では人間の上位にある天人といえども、その寿命は有限（何百年、何千年など諸説あり）で、永生（まっしやう永久の命）ではなく、しかも死期が近づくと五衰という哀れな症状に陥るのです。阿弥陀様の浄土（極楽）は無量寿の世界、つまり永久になくなることはなく、そこに生まれると私たちは永久の命を賜ります（第十五願『第三十六部』参照）。そこは、この世の無常・苦・無我・不浄とは逆の常・楽・我・浄の世界です。永生の楽果とはこのことです。

また、「私にどう体で感じさせてもらえるか」とのお尋ねですが、「永生の楽果」そのものを今感じていただくことはできません。今は、「間違いなく極楽に往生できるとの思い（正定聚）から、身も心も躍り上がるほどによるこぶ。そして、御恩報謝のお念仏の日暮らしをする」以外にはありません。『第三十一部』に親鸞聖人の『一念多念文意』や、蓮如上人の『御文・一帖目一通』を引いて説明したので、それを参照ください。

# 感想 意見

## 【四十二部】

北海道小樽市 荒谷 しげ子さん

初めてお便り致します。自宅で習わぬ経を読みつつも、その内容に心を止めて考える事が多い年令になりました。この度、大谷家のお立場をはっきりと語られ、それを拝読しまして、思った事でございます。宗教はいつの世も多くの苦と戦いの中に人々の心の安定と道を教えてくれる道しるべであります。確実な歩みの後に歴史が残るのです。お立場をはっきりと明言なさり、いつも笑顔で、時には強くこの問題が広く皆様の心の気付きになる日まで。

## 【四十二部】

名古屋市中川 かな子さん

「得度して二年」を読んでとても感動しました。誰にやらされる訳ではなく自分で決めたことだから、逃げられない、又その事に感謝の気持ちを持てる素敵な人柄が伝わっ

てきました。

何事も考え方によって気持ちの持ちようも変わってくるんだなって学びました。

#### 【四十一部】

東京都 鈴木 健太郎さん

今回の「日本史の中の大谷家」は初めて聞く内容が多く、ことに「教如上人が信長と戦われた、そのことの正しさを残すために東を残してくださいだったのでないか」という一節が最も印象に残りました。

続きを拝見できますことを楽しみにしております。

#### 【四十二部】

御本堂の落慶をお祝い申し上げます。

今回も数々のお写真のおかげで様子がよくわかります。

各宗派の声明について、コンサート型と参加型に分類されていらっしやるのは御門跡様が合唱をされていた御経験からの優れた分析だと思えます。

#### 【四十三部】

往相は一種免許、還相は二種免許というたとえばとてもわかりやすいと思えました。

紛争の原因がGHQの占領政策にあることを初めて知りました。  
俗事と違って、教えの中身は多数決で変えられるものではないと思います。

【四十三部】

東京都町田市 諸戸貞昭さん

どうぞ日本の良いところを力強くすすめてください。

〳〵老いてこそ ひとあじ知れる 梅の花〳〵

# お知らせ

本願寺寺務所

前任闍如上人

御祥月命日法要

◆ 4月12日 逮夜 午後2時

『正信偈』ほか

◆ 4月13日 日中 午前11時

『文類偈』ほか

コーラス（大谷楽苑）

★両日とも、雛人形の展示もあります。

この御法要は「句切」「十淘」という、本願寺で勤められてきた伝統の声明です。是非お参りされて、お聴きください。

古くから大谷家に伝わる

「愛らしき雛人形と雛道具展」

◆ 4月1日～10日 本堂にて（無料）

午後1時～午後4時30分



大谷智子前裏方の内裏雛  
(香淳皇后様の内裏雛と同時に作られた。  
京都・丸平第四世 大木平蔵師作)



## あとがき

みめぐみの刊行委員会

嵯峨のあたりは、花々の季節を迎えます。今回「阿弥陀様と本願」は一気に第二十三願から第二十七願まで進み、読者の質疑にもお答え下さいました。また光道台下は、本願寺のお正月・修正会について執筆されました。報恩講に次いで重要なこの法要が、新しい本堂で伝統通りに勤められたことは本願寺の大きな前進であり、喜ばしいかぎりです。

この修正会の意味は本文の中で詳しくお説き下さいましたが、また、「お正月やおめでたい時は神社にお参りするもので、お寺には参らないもの」と思い込んでいる方があることにご心配もされています。これからも毎年、嵯峨・本願寺で修正会が勤められます。皆さん、是非本願寺のお正月にお参りされ、「御献杯」のお下がりがりも味わってください。

皆様からのご感想、ご質問お待ちしております。どしどしお寄せ下さい。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。

『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

## みめぐみの 第44部

---

2012年3月5日 印刷

2012年3月10日 発行

定価 200円

著 者 大谷光道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21  
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株)中外日報社

---





みめぐみの刊行委員会刊